

## IDECAジアセミナー

本研究科では、正規の履修科目とは別に、文理融合教育の一環として、英語を共通語とする IDECAジアセミナーを、全コースの学生を対象に開催している。その目的とするところは、

- ①アジア各国の文化、歴史、教育などを、当該国の教官や留学生から直接に聞くことで、その理解を深めるとともに共通の認識を高める
- ②国際交渉の場において重要な要素である英語を手段としてお互いに意志の疎通が計れる能力を身につける
- ③専門分野を通してのみアジアを見るのではなく、多角的な視野から考察できる能力を身につけることである。

最近のテーマとその内容を簡単に紹介する。



第一回 IDECAジアセミナーは、一九九四年十二月九日、総合科学部教室において二時間にわたり約六十名が参加して行われた。このセミナーの目的は、一九九四年十一月にインドネシアで開催された APEC (アジア太平洋経済協力会議) サミットの意義と今後の日本の国際協力のあり方を議論することであった。

セミナーでは、山下が APEC の概要とボゴール宣言の経済的意義について報告し、続いて中達が、冷戦後の世界における日本の外交戦略の論点を、アメリカかアジアかというオプション及びアジアにおける中国問題の大きさについて整理した。最後にアピチャヤが途上国の立場から、アメリカが

**東アジアの発展と地域協力  
—APECと日本—**  
(Economic Development and Regionalism in East Asia - APEC and JAPAN)

講師：山下彰一

(国際協力研究科長、教授、経済発展論)

中達啓示

(国際協力研究科、助教授、国際関係論)

アピチャヤ・ブンターセン

(国際協力研究科、外国人

(タイ)研究員、国際開発論)

司会：松岡俊二

(国際協力研究科、助教授、開発計画)

主導する APEC のあり方について批判的に論じた。

APEC は、一九八九年、オーストラリアの当時のホーク首相の提唱により発足したもので、現在その十八か国・地域より構成されている。APEC の世界 GDP 比率は五二%、人口は三八% と、世界の成長センター・東アジアをつかえる APEC は、EU や NAF TA とは比べものにならないほど大きな影響を世界に与える存在である。

APEC は、通常、貿易・投資の自由化促進という経済主義的組織と考えられているが、人材育成やエネルギー・環境面での協力などの社会開発の面における国際協力も、当初から位置づけられていた点に注目する必要がある。

APEC は、一九九三年のシアトル会議から、従来行つていなかつた首脳会議 (APEC サミット) を開催するようになり、アメリカのマハティール首相の EAEC 構想のように反発する動きも活発化している。こうしたアメリカの動向には、マレーシアのマハティール首相の EAEC 構想のように反発する動きも活発である。

こうした動きに対し、日本は長期展望に立った的確な外交ができるない。冷戦が終結した今、従来の表向きの国連中心外交、実際はアメリカ追随における日本の外交ができないない。冷戦が終結した今、従来の表向きの国連中心外交、実際はアメリカ追随における日本の外交ができないない。

## インドネシアにおける文化、教育及び造船業

(Indonesian Culture, Education and Shipbuilding Industry)

講師：スウェティー

(スラバヤ工科大学上級講師、インドネシア)

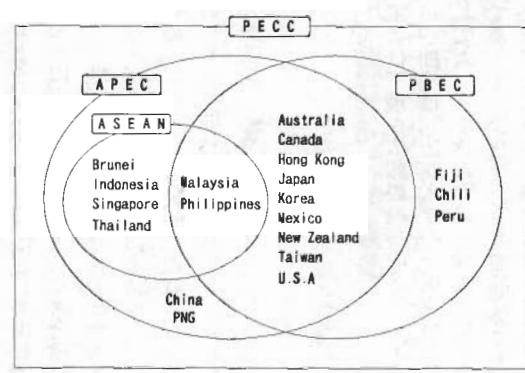
司会：斎藤公男

(国際協力研究科、教授、開発技術)

日本が今後の国際関係や国際協力の方を考える上で、貴重な示唆を与えてくれる。

今年の第七回 APEC 閣僚会議及び第三回 APEC 首脳会議は大阪で開催される。暖昧な日本は、はたして変わらんだろうか？

(松岡俊二)



▲経済圏のグループ化

第二回セミナーは、広島の造船所で研修中のスラバヤ工科大学のスウェティー氏を招いて、専門分野の造船業

だけでなくインドネシアの文化や教育についても紹介していただいた。同氏は一九七七年より三年間本学に学び、工学修士の学位を取得されている。

インドネシアは大小一万三千余の島からなる島嶼国で、これらの島には約一億八千万人の人々が住み、気候は海洋性熱帯気候に属し、季節の変化に乏しく雨期（十一月～三月）と乾期（四月～十月）に区別される。また国民の大多数はイスラム教徒であるが、信教の自由は保障され、キリスト教、ヒンドゥー教などさまざまな宗教が信仰されている。代表的メニューとしては、ナシ・ゴレン（炒めご飯）、サテ（焼き鳥）、ガドガド（野菜をピーナツソースでえたもの）などがあり、パパイヤ、パイナップル、ドリアンなども豊富なフルーツ天国であるなどの一般的紹介があつた。

インドネシアの教育は、我が国と同じく、六・三・三制である。学術教育プログラムと職業専門教育プログラムがあり、前者は大学への進学を目指すもので、全国に四十七の国立大学と九〇〇の私立大学があるが、高等学校を終え大学へ進学できる者の割合は少ない。

インドネシアは世界最大の島嶼国であり、内航海運業は国内経済の発展に伴って増大している。また、漁業や海洋資源の利用も重要な産業と考えられている。近年、科学技術庁(BPPT)は、造船業を国内経済発展のための重要な産業の一つに位置づけ、国策による商船隊整備プロジェクトや造船業を育成す



▲インドネシアの伝統的家屋

るためのプロジェクトに大きな投資を行っている。

造船業に対する政府の後押しもあって、インドネシアにはスラバヤ、ジャカルタを中心に造船所（主要11）、造船学科を持つ大学（4国立大、4私立大）及び高等専門学校などその数は比較的多い。スラバヤにあるパル造船所は、在も艦艇の建造、修繕を行っているが、國營企業の模範として重点的に設備投資をしており、国内における実験工場の位置づけで、自社でトレーニングセンターを持ち、ここでの技術を他の国内造船所に波及させる政策をとっている。新しい技術の習得にも積極的で、社員を海外で研修させるための奨学生制度があり、広島大学にも研修生を派遣している。

（斎藤公男）

（斎藤公男）

## 極東アジアにおける マツ林生態系の保全と管理

(Conservation and Management of Pine Forest Ecosystem in the Far-East)

講師：洪 善基

（広島大学、総合科学部、外国人特別研究員）

司会：中越信和

（国際協力研究科、助教授、生物資源開発）

本学総合科学部の日本学術振興会外国人特別研究員である洪 善基博士に、第三回セミナーの演者になつていただいた。氏は韓国から本学に留学され、平成五年度に生物圏科学研究科で博士（学術）の学位を取得している。学位論文の主要部分の「韓国と日本のアカマツ林の生態学的研究」と平成六年度の私との共同研究「極東アジアにおける農村景観システムの生態学的解析」の成果から、表題の講演をされた。氏は私の中国でのマツ林調査にも参加されていたので、広く東アジアにおけるマツ林の生態についても言及された。

西日本に広く分布していたアカマツ林は、一九六〇年代からの農村を中心とした燃料・肥料革命により、長らく続いた里山としての使命を終え、変貌しつつある。しかし、韓国では依然としてアカマツ林は里山として利用され続けている。韓国でのアカマツ林利用には、林内での墓の造営も含まれてお

り、燃料採取等とともに林地の生態遷移の進行が阻止されている。アカマツ林は遷移途中相で最も純生産力が大きく、これを韓国人も日本人もよく知っていたのであろう。従つて、このマツ型里山を伴う稻作をする農村地域の景観システムが維持されてきたと考えられる。中国でも、マツの種類は違うがマツ型里山がある地域では同様である（例えば、浙江省、四川省、雲南省など）。

しかし、韓国での近年の急速な工业化や農村の過疎化は、アカマツ林の伝統的管理を次第に困難にしつつある。すなわち、木質燃料、肥料が不要となり、かつ人手が不足してきているからである。ところが、韓国では依然林地の土壤条件は貧栄養で、すぐには広葉樹林には移行しにくい。もちろん、長期的にみればナラ林に遷移するであろう。もし、韓国で民族的、風水地理的な伝統をもち、景観の保全を計画するなら、アカマツ林において多目的な利用を促進しマツ型里山を維持することが必要である。このことに困惑している日本は、負の見本と考えられる。韓国ではまだ山林に関する関心が高いので、今なら間に合うと考える。その成果が日本に紹介され、日本のマツ型里山が保全される契機となるかもしれません。

講演後の質問は極めて活発で、二次林がいかに持続可能な重要な資源であるのかが参加者に理解されたようであつた。

（中越信和）